レギオンの将

子儀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レギオンの将

【Ｎコード】
Ｎ７９７６Ｚ

【作者名】
子儀

【あらすじ】
嵐の夜が明けてみれば、昨日までの街並みは姿を消し、一面の森が広がっていた。家ごと異世界に流されてしまった青年は、日々を過ごすうちに自分が奇妙な力を得たことに気づく。ＲＴＳの面白さを表現できるか挑戦します。基本的に旅をしない異世界譚。

01話　来訪者

朝日と共に、その都市は活動を始める。
巨大な門が開かれ、外で夜を明かした旅人達と次の街への移動を急ぐ商人達が、ひっきりなしに行き交う。
気の早い露天商が店を広げ、声を上げて客を取り合う。
決して裕福ではないが、笑い声の絶えない街。有能とまでは言えないものの、誠実で慕われる為政者の人となりが見えるようだ。

その都市には、他の街ではあまり見ることのできない奇妙な施設があった。
直径５ｍほどの白い円形のステージ。一枚の巨大な岩で出来ていると思しきその表面には、ステージ全体を覆う巨大な魔法陣が描かれていた。ステージの周囲は若干の距離を置いて身長の倍はありそうな高い壁で囲まれ、その上部には銃眼のようなスリットが等間隔で刻まれている。
全体的に見ると所謂コロシアムのような形状をしているが、そこには娯楽施設のような一種の華やかさや遊びといった要素は欠片も見当たらず、街の中にあるにも関わらず戦場のような緊張を感じさせる佇まいであった。
現在、中央のステージ場には何の姿も見えない。
しかし、取り囲む壁の上の通路には、間隔を置いて数人の兵士が常に立ち、ステージに向かって監視の目を光らせているのだ。
壁を城壁とすれば、兵士は歩哨といったところか。だが、その歩哨は外敵に対してではなく、内側に対して警戒していた。

この施設――正確には中央のステージのある場所は、“魔人の門”と呼ばれている。
門というが、それらしい設備は何も見当たらない。稀に勘違いさ

れるが、魔方陣の刻まれたステージは“魔人の門”に対する迎撃設備として、後から設置されたものである。
あくまで“魔人の門”とは、コロシアム中央の空間を示す名称である。
最初に“門”が開いたのが確認されたのは、１００年ほど前。その際に現れた異形の住人によって、その時点である程度発展していたその都市は少なからぬ被害を受けた。以降、平均して年に1度程の頻度で、“門”の向こうから異形の住人が訪れている。
この施設は、来訪者から街を守るための、文字通り前線基地なのであった。
そして今日。
“門”の空間が歪み始め、新たな来訪者の訪れが告げられた。

「何……が……？」
男はうずくまったまま、ひどい船酔いのときのような頭痛と吐き気をこらえ、周囲を見回す。
その瞳孔は横に細長く、頬から首にかけて、そして肘から先には細かいウロコが生えているのが見て取れる。
男が庇うようにして抱きかかえているのは、妻子らしき女性と赤子の二人。女性は青ざめた顔で固く目を瞑り、震えていた。
意識がだんだんとはっきりしていくにつれ、男は武装した集団に周囲を囲まれていることに気がついた。
揃いの胴鎧にヘルム、槍に剣と妙に時代遅れな格好をしていて、一瞬何かのイベントかと安心しかけ、兵士達の異様な緊張感と殺気を感じ取り、半ばパニックに陥る。
ここはどこだ！確か今まで家族と買い物を楽しんでいたはずなのに！
叫び声を上げようと息を吸い込んだとき、胸の奥に大きな力が流れ込んだように感じた。

「ぐっ……あぁあああっ！」
一瞬感じる、全能感。体が焼けるように軋み、作り替えられていくようだ。
見れば妻も似たような感覚があるのか、こちらの服を掴む手が何かをこらえるかのように強く握り締められる。
幼い息子もまた、何かを感じたのか大きな声で泣き始めた。
と、その時。
周囲を囲む兵の中で、とりわけ立派な鎧を着た男が片手を上げた。同時に足元の白い岩に刻まれた模様が光を発した。
すると今度は、今までとは逆に体の中から何かが吸い出されていくのが分かった。体が震え、立っていられずに肩膝をつく。
息子の泣き声がさらに大きくなった。心配だ。早くここから離れなければ。
そう思った瞬間。
小さな風切り音と共に、唐突に泣き声が止んだ。
恐る恐る、腕の中の息子へと目を向ける。

そこには

胸から矢を生やした

骸となった息子の姿があった

「うわあああぁぁぁぁぁぁ！！」
声の限り叫ぶ。
それを合図にしたかのように、兵士達がこちらへと突進してきた。
妻をかばいつつ、夢中で腕を振り回す。体を剣が、槍がかすめて鱗が剥がれ、血がしぶき激痛が走る。
だがそれでも、男は無我夢中で敵を振り払い、逃げ道を探す。

――ずぶり

鈍い音と共に、大量の血が飛沫く。

同時に、腕の中から微かな悲鳴が聞こえ、服を掴んでいた手から力が抜けたのが分かった。

背中を何本もの刃に貫かれ、ゆっくりと倒れていく妻。

呆然とそれを見下ろした瞬間、一本の槍が腹を貫いた。

衝撃に、動きが止まる。

さらに、一本、二本と次々に体に打ち込まれていく。

あまりの激痛に声をあげようとして、喉の奥から溢れた血を大量に吐き出した。

最後に、水平に薙がれた剣が首を落とし、男はゆっくりと倒れる。

絶望に見開いた眼に、恐怖に強ばった兵士達の顔を映して。

０１話　来訪者（後書き）

１話にエピソードを挿入しました。
なんとなく世界観を感じていただければ幸いです。

02話　漂流初日

旗中（ハタナカ）　将貴（マサキ）の目覚めは最悪だった。

「……うー……」

がんがんと響く頭痛をこらえ、のっそりと起き上がる。

昨晩から派手に吹き荒れていた台風のせいで眠りでも浅かったのだろうか。家も妙に軋んでいたような気がする。

ちょっと睡眠時間が減るだけで体調を崩す身体が憎い。台風の間の鬱憤を晴らすかのように、カーテンの隙間から無駄に元気に差し込む日光が恨めしい。

元々あまり明るいのは苦手なのだ。締め切ったカーテンはそのままに、トイレに向かった。

先祖がちょっとした地主だったということで無駄に広い旗中家は、祖父母が亡くなり、後継であった両親が仕事の都合で海外生活を余儀なくされ、通っている大学が近いという理由で将貴に管理を任されている。正月は親戚が集まり賑やかな自宅も、正直一人では持て余している。

体調が優れないときにこの長い廊下を移動しなくてはならないのは億劫だし、トラブルが発生したときの対応が厄介なのだ。

特に今日のように。

「ん？」

パチンパチンとトイレのスイッチを切り替えるも、一向に電気が点く様子がない。

思っていたよりも前日の台風はひどかったのか、停電であればはやく復旧してくれればいいが。

そんなことをうまく働かない頭でぼんやりと考えつつ、用を足す。手を洗おうと蛇口をひねったとき、今度は水も流れないことに気が

ついた。
（そんなに台風はひどかったのか……）
朝からトラブルの連続にうんざりしつつ、居間へと向かう。
（庭は大丈夫かな）
母屋は数年前に改築したから余程じゃなければ大丈夫だと思うが、明治の頃からあるという蔵は正直心配だ。以前に地震が起きたときは中の棚が一部壊れて大変な目にあった。
とりあえず様子を見るつもりでカーテンを開け、庭の向こうに目を向けた将貴は、諸々のトラブルは、目の前にある光景の余禄であったことを悟った。。
庭を囲む背丈をわずかに越える、敷地を囲った塀。
昨日までその向こうに見えていた、見慣れた街並みは姿を消し……
一面の森が広がっていたのだった。

「……ないわー」

思わず呟きつつも、意外に自分が冷静であることを将貴は感じていた。それは一種の防衛反応なのかもしれない。だが、何が起きているのかを確かめる必要がある現状では、それがありがたかった。
とりあえず外に出てみよう、と考える。
目の前にある窓からでは高い塀に遮られて、庭の一部と立ち並ぶ木々の上の方しか見えない。どの程度の異常かが、確認できないのだ。
2階に上がるのもいいかもしれないが、周囲をぐるりと見て回るためには部屋をいくつか回らなくてはならず、面倒なのでやめた。
ここからすぐに外に出ることも出来るが、塀の外に出るには結局玄関前を通るので、ひとまず玄関にまわり靴に履き替えることにした。

少し迷ったが、普段使っているスニーカーを履くことにした。塀の向こうに見えた森がもしも続いているのであれば、しまい込んでいたトレッキングシューズを引っ張り出す必要があるかもしれない。だが、とりあえずは塀の向こうをぐるりと1周してみて、それから考えようと思う。

ドアノブに手をかけ、そっと押し開ける。

気圧差でもあったのか、ドアの隙間から外の空気が吹き込み……

息を吸った瞬間、将貴は喉が燃え上がったように感じた。

「ぐっ……！」

熱はそのまま胸に燃え移り、肺を焼く。

血管に取り込まれ、心臓が激しく脈打つ。

忘れていた頭痛がぶり返し、思考する余地を奪う。

荒い息を継ぐことで、さらなる熱が取り込まれる悪循環に、耐え切れず膝をつく。

視界が明滅し、大きく咳き込んだあと、将貴はその意識をゆっくりと手放した。

０２話　漂流初日（後書き）

前話にエピソードを挿入したついでに、元０１話、０２話を結合しました。
ちょっと短さが気になってたので。
これで分量的にはバランスとれたかな。

03話　復調

将貴が意識を取り戻したのは、太陽が天頂にさしかかろうかという時だった。
玄関タイルの冷たさを肌で感じ、自分がうつ伏せに倒れていることに気づく。
「……っ……ごほっ……」
喉の奥に違和感があるような気がして二、三度咳をしてから、意識を失う直前のあの体の痛みが消えていることに気がついた。朝起きたときから続いていた頭痛も、きれいに消えさっている。むしろ普段より調子がいい程ではないかと感じる。
先ほどの異変は、ドアを開けた直後に発生した。ということは外に有毒なガスでも溜まっていたのだろうか。朝の不調も、部屋の換気口あたりからわずかに外気が入ってきていたのかもしれない。そうであれば、外に出るのは非常に危険だと考えるのが正しい判断なのかもしれない。
だが。
将貴は開いたままのドアから、外へ目を向けた。
開きかけた所に寄りかかったため、そのまま押し開いていたようだ。そして倒れている間、将貴の体をストッパー代わりにして、ずっと開きっぱなしになっていた。
（毒ガスか何かだったら、とっくに死んでるはず……か）
少なくとも、今は外に出ても問題はないようだ。
異変の原因がなんだったのかは分からないが、有毒なガスが流れてくる事があるのならば、長時間外に出るのは危険かもしれない。
一瞬そう考え、
（いや、それはないかな）
すぐに取り消した。
一呼吸であれだけの反応をする気体が毒であれば、今現在体に何

の不調もないことがおかしい。少なくとも倒れた時点で今のようにドアが開いてしまったのであれば、そのまま死んでいたはずだ。たまたま吸った瞬間、致死量に至らないぎりぎりの量のガスがドア付近にあり、自分が吸った直後にどこかに流されていった。そんな不自然なことが起きていたとは考えにくい。

それに思い返してみれば、倒れる直前の体の熱。

あれはそう、程度は違っても、強い酒を一気に飲んだ時の熱に似ているような気がした。

もしかしたら異変の原因となった物は変わらずここにあるが、体が慣れて処理できるようになったのかもしれない。気持ち悪いほどに急激に調子を取り戻している体を確認しながら、そんな予感がした。それと同時に、もしかしたら体質が合わず、そのまま目覚められなかった可能性があったことを考え、ぞっとしたのだった。

いつまでも玄関に座り込んでいても仕方ない。

外に出ようとしていたことを思い出し、将貴は立ち上がった。

軽い足取りで外に踏み出し、飛び石を踏みながら正面にある門へと向かう。

（やっぱり何もないな）

本来であれば門の向こうには向かいの家がすぐ見えるはずだったが、今では影も形も無い。あるのはちょっとしたスーパーの駐車場程度の広さの広場と、それを囲むようにして広がっている森だった。

近づいてみると、どうやら敷地の境界で途切れているわけではないことが分かる。考えてみれば当たり前なのかもしれないが、旗中家というエリアが森になっていないのではなく、森になっていないエリアにたまたま旗中家の敷地があったというのが正しいようだ。敷地の外側、舗装道路も1車線程度の幅は残っていることが確認できた。

境界線を目でなぞるうち、あることに気付く。

「これは……円、かな」

緩やかな曲線を描いている境界線は、無作為なものではなく、綺麗な弧を描いているように思われた。
今いる場所から見える範囲では中心がどこなのかは確認できないが、始めの予定通り家の周囲を回るとき、ついでに境界線を追ってみることにした。

「はぁ、どうしようか……」
将貴は塀にぽっかり空いた穴を目の前にして、ひとりごちた。
境界線が土塀の一部をまたぐ形になってしまったため、途中で欠けてしまっていたのだ。正方形に近い敷地は、円（？）の中に綺麗に収まらなかったようで、角の部分に１ｍ程の穴が開いてしまっていた。
もしかしたら危険な野生動物がいるかもしれない。出来ることなら塀はちゃんとした形で残っていて欲しかったのだが。
「考えても仕方ないか。後で適当に土嚢でも作って積んでおこう」
確か布袋が結構余ってたな、と呟きつつ、先へ進むことにする。
一人で土嚢を作ることを想像するだけでうんざりするが、自分で出来る程度の補修は怠らない方がいいだろうと考え、同じような破損を見つけたらなるべく覚えておくことにした。

簡単に周囲を回った結果、周囲の様子をある程度把握することができた。
まず、境界線は大雑把に見た限りでは当初の予想通り、ほぼ円状に引かれているらしい。中心点を調べるのは後回しにしたが、恐らく正門から向かって左手側にある庭のどこかを中心としていると思われる。直径が敷地の対角線より若干広い程度なので、入りきらなかった反対側の２角が欠けていたことが分かった。
正門のある側を除いた三方は森になっている。少し入って見た限りではしばらく続いているらしく、そこまで樹木の密度が高くないにしても、奥まで見通すことはできなかった。木々の高さは３０ｍ

ほどはありそうで、２階に登った程度では枝葉が邪魔をする分むしろ近い距離までしか見えない。それぞれの方角に何があるかについては、それなりの準備を整えてから探索しに行くことにした。
正門側にある広場は、脛ほどの高さの草が一面に生えているが、日当たりも風通しも良く、昼寝をするには絶好のロケーションと言えた。後でハンモックなどを起きたいなと、呑気なことを考える余裕はできてきた。何より広場の反対側から、川が流れているのを見つけられたのが大きかった。一番の不安が飲み水の確保だったため、当座の不安は解消できた。食料は保存食が数日分あるので、あとは釣りか、罠で何か獣を捕まえるしかないかと考える。
些細なことではあるが、正門側に広場やら川やらがあるおかげで、利便性の面では助かるな、というのが将貴の感想であった。

とりあえずは、周囲の地形確認と飲み水の確保をするだけで、日が傾きかけている。
案の定電線は途中から寸断されており、灯りを確保することは出来ない。懐中電灯はあるが、なるべく電池は節約したい。日が暮れた時点でさっさと寝ることにして、明日はもう少し遠出をしてみよう。
そう決め、今日は準備のために家へと戻ることにした。

０３話　復調（後書き）

０１話、０２話は連載の投稿の仕方の確認もあったので短めだったのですが、今回から少しボリュームを増やします。
投稿済みの話についてもちょっと物足りないので、もうちょっとエピソード入れようかとは思ってます。
今のところファンタジー要素皆無の漂流物っぽいですが、そろそろ話を動かしていきますので、もう少々お待ちください。

０４話　出発

将貴が旗中家（本拠地）周辺の探索を本格的に開始してから、早くも一週間が過ぎた。

地図はなく、周囲は完全に森に囲まれ、どちらを向いても同じような景色。道といったら精々一人分の幅しかない、曲がりくねった獣道しかない状況で森に分け入るというのは、予想以上に神経をすり減らすものであった。

方角については、漂流前と同じように方位磁針を頼りにすることが出来たのが、不幸中の幸いだ。

将貴の手元には、この一週間で作った、本拠地周辺の地図があった。

地図とは言っても、適当な方眼用紙に、大雑把な地形と番号が振られたものである。

将貴は、蔵にあった大量のロープと塗料、そして先に述べた方位磁針を利用し、周辺の森を等間隔に、格子状に印をつけて回った。その上で、特徴的な地形や構造物を地図に落としたのだ。現状ではおよそ２ｋｍ四方といったところだろうか。もちろん縮尺や方向については、使い慣れた現代社会の精密な地図と比べるのもおこがましいものだが、何もないよりは、はるかにいい。

将貴は、地図の出来を確認し、これまで行なってきた“面”の探索から、新たに“線”の探索に切り替えることにした。少なくとも、多少遠出をしたところで、再びこの家に戻ってくることは可能だと判断したのだ。

始め、世界は自分の家を残して、すべて消えてしまったのかと思った。

そして、逆に世界から自分が消えたのだ、と確信した。……少な

くとも両者は表裏一体で、あくまで主観的なものではあるが。
根拠となったのは、円状の境界線、その中心点がどこにあるかを特定したときだった。
将貴はその場所を覚えていた。

◆　◆　◆

もう15年近くになるだろうか。
小学生の頃のことなどほとんど覚えていない。
だがあの日、あの瞬間のことだけはいつまでも忘れる事がなかった。
麻間（アサマ）　三尋（ミヒロ）。それが彼女の名前だ。
歳は確か、当時14、5歳だったか。
祖父母の家の近所に住んでいた三尋は遠縁の子だった。年の近い子供が他にいなかった事もあり、帰省したときはいつも遊んでもらっていた。将貴自身もすっかり懐いて、田舎にいる間はずっと後ろをついて歩いていたものだ。

――「大きくなったら、みー姉とケッコンする！」

……とは、子供の頃にはよくある口約束だった。
今思えば両親たちは妙に乗気だったし、当時の自分もまったくそれを疑っていなかった。
そのまま数年たっていれば、少年特有の気恥しさが生まれて、もっと違うことを言っていたかもしれないが。

だが、彼女は突然に姿を消した。
文字通り、突然に、だ。
祖父母の家の庭で、二人で遊んでいた。鬼ごっこか、隠れんぼか。

それともただおしゃべりをしていただけだったか。その日何をして過ごしていたのかはよく思い出せない。
立ち止まって、話して。
ある瞬間、フィルムを繋ぎ変えたように、三尋の姿は将貴の目の前から消えていた。

その後、親戚たちは当然のように大騒ぎになり、大掛かりな捜索も行われたが、何の手掛りも掴むことはできなかった。
唯一の目撃者であったはずの将貴の証言も、突然目の前から消えた、などと言われても信じられることはなく、一時期は嘘つきの厄介もの扱いをされたこともあった。
数年後、祖父母が共に亡くなり、家を手放すという話が出たとき、一番抵抗したのが将貴だった。
この家まで無くなってしまえば、三尋との繋がりも完全に消えてしまうと思ったからだ。

◆　◆　◆

そして今。
一度は切れた糸が、再びつながった。
境界線の中心点は、あの日三尋が消えた、あの場所だった。
人一人に対して、家一件。
規模は全然違うが、起きているのはきっと同じ現象(こと)だ。
ならば、この世界のどこかに彼女がいるかもしれない。
そう考えてしまった時点で、将貴の中から、“帰る手段を探す”という選択肢は無くなった。元の世界への未練というものが不思議とまったく感じられなかった。三尋を見つけることが出来た後ならばともかく、今この瞬間、「今すぐ元の世界に帰る」ｏｒ「一生この世界に残る」の二択を突きつけられたならば、迷わず後者を選ん

だだろう。

“この世界”と表現したが、将貴はこの時点で、今いる場所が現代の地球上ではないと判断している。１０数分ほどであるが、一日が２４時間よりわずかに長いことが分かったからだ。

今起きているのがはるか過去か未来へのタイムスリップか、並行世界か異世界へのトリップか、それともそれ以外の何かなのかは分かっていない。だが、そのどれであるかは、あまり関係ないと思っている。帰れる場所にないのであれば、どれであろうと同じだ。

（たまたま現地の誰かに拾われて、いろいろ教えてくれるなんていう展開であればある意味楽だったのにな）

様式美ではあるが、世の中そうは上手くいかないこともある、と苦笑した。

そもそもこの世界に人がいるのかも分からないのだ。

探索を開始するにあたり、将貴は決めている事がある。

それは、この家に戻ってくるということだ。

身一つでこの世界に来たのならともかく、折角家があるのだ。ここを拠点にしない理由がない。

それに、自分からは見つけることができなくても、相手の方から――相手、と呼べる存在がいれば、だが――この家を見つける可能性もあるだろう。ただ、それが害意を持っている相手の場合は涙を呑むしかない。

なので、数日単位でこの場所を離れるのはいいにしても、戻って来られるように準備してきたのだ。

将貴は引っ張り出してきた４０Ｌのリュックに数日分の食料や毛布、調理道具を始めとした荷物を詰める。服装はポケットの多いベストに、足元はトレッキングシューズという若干ラフではあるが、

典型的な登山スタイルだ。父親が飽きっぽいタイプで、用具と本を一通り集めて満足する、ということを繰り返してきたのが助かった。
そして、狩猟道具兼武装として、山刀とスリングショット――いわゆるパチンコを腰の後ろに下げる。
どちらも祖父由来のものである。
山刀はグリップにナックルガードがついたもので、刃渡りが４０ｃｍ弱。刀身は先端ほど幅広になっており、刃先が剣鉈（刀の切先のような形状）になったものだ。数十年に渡って数多くの獣の血を吸ってきた逸品である。これで熊を仕留めたことがある、と言っていたが多分冗談だろうと思う。洒落にならないサイズと威力（切れ味というよりもそちらの方がしっくり来る）のため、今まで蔵で封印されていた代物だ。
スリングショットは祖父自作のもので、オーソドックスなＹ字型の先端が手前側に曲げられたものだ。最初は子供のおもちゃとして作り始めたのだが、凝り性の祖父がだんだん悪ノリを始め、安定性強化のためにグリップを改造し手首の固定器具を付け、命中率強化に照準を付け、威力強化でゴムを取り替えとしていった結果、試し打ちの的にした空き缶が爆裂したので、これも封印指定とされていた。

準備が整ったので、外に出る。
当然鍵は閉めない。無くす危険もあるし、そもそも盗みに入る人がいるかも怪しい。いたらいたで結局壊されるだろうから、むしろ開けておいた方が建物にダメージが入るよりはマシだ。
とりあえず向かう先は、広場の脇を流れている川をひたすら下ることにした。
人に会うとしたら川沿いのほうが可能性は高いだろうし、獣道しかない森の中よりは歩きやすいだろう。視界も開けてるし、帰るときは逆に川を遡れば迷わない。上流方向を選ばなかったのは、人里

離れた川の上流に向かっても、森が深くなるだろうと思ったからだ。地球でも大陸であれば複数国家にまたがる川などザラにあるのでこの考え方はいかにも日本人的かもしれないが、この地点の川幅が２m程度であることを考えると、下流に向かったほうが可能性としては高いことは確かだ。

当面の目標としては、川に沿って3日分進み、何も見つからなかったら、少し奥に入った位置から川と並行に戻り、マップを埋める。何か変わったものが見つかった場合は、その場所への距離次第で、即立ち寄るか後回しにするかを考えることにした。

０４話　出発（後書き）

それぞれの行動にはなるべく根拠を持たせ、展開の都合のための飛躍的な行動は取らないようにしたいと考えています。
とはいっても知識が豊富な方ではないので、こういうシチュエーションでこの行動はおかしい、とか、こういう場合のセオリーは、とかそういう意見がございましたらお待ちしております。

しっかし、登場人物がいないせいで見事に地文ばっかりですな。
次回あたりでキャラ増えます。

05話　遭遇

しばらく歩いてみた限りでは、この川は平野をずっと緩やかに流れているもののようで、急な勾配に回り道をしなくてはならない羽目には今のところなっていない。少し離れれば相変わらずの森だが、川沿いを歩く限りはせいぜい膝丈の草が生えている限りで、歩きやすいのは非常にありがたかった。

（やはり川沿いを選んだのは正解だったな）

この調子であれば、自分に課した3日の期限内に、思ったより遠くまで進めそうだ。帰りの目印のためのマーキングを手近な木に残しながら、そのように思う。

快適な旅程に貢献しているのは地形だけではなかった。

山歩きなどはたまの行事に半強制的に参加させられた時に行うくらいで、山に慣れているとは言い難い。また高校のときに比べれば運動する機会も減り、体力はずっと落ちている。

なのに、歩いても歩いても、ほとんど疲れを感じる様子がなかったのだ。

さすがに小走りに近い速度を続けるとだんだん息が上がってくるが、少しペースを落とせばすぐに回復する。また、足の疲労についても同様だった。思えば1週間も前からずっとこの体の好調は続いていたように思う。急に慣れない――どころではない環境の変化があったにも関わらず体調を崩す様子がなかったのだ。

異常と言えば異常だが、本人は「空気が合ったのかな」などと呑気に考えている。

考えても仕方のない事であるし、デメリットがない限りは素直に受け入れることに決めた。

幸いと言えば途中で食べられる木ノ実や果物の生る木を見つけられたのも良かった。

最初の1週間で1度ウサギに似た小動物を捕まえることが出来た

が、やはり経験がないために随分と手こずったものだ。どうしても時間がかかってしまうので、旅の最中は出来れば避けたい。一応某カロリー補給食も持ってきているが、現地調達出来るならそれに越したことはないのだ。味についても文句はない。むしろ好みだった。種を植えるか……出来れば苗木を持って帰れないかと真剣に考えた。

それを見つけたのは、本拠地を出てから3日目の昼前だった。

比較的若い木が多いのか、本拠地周辺に比べて比較的背が低く、密度も低かったので気づくことが出来た。

進行方向から斜めに外れた方向、木々の頭越しに見えるダークブラウンの屋根。色合いとしては決して目立つものではないが、人工物特有のその直線で形作られたシルエットは、森の中にずっといたからこそ目を引いた。

（場所だけ覚えて、今はこのまま先へ進もうか？）

一瞬考え、否定する。そもそも元々決めた3日という括りも、何も見つからなかった時のためのボーダーラインだ。“何か”が見つかった今、律儀にそれを守る必要もない。

さらに言えば、さすがに少々人恋しくなってきた所なのだ。将貴は比較的一人を苦にしないほうではあるが、この世界にもしかしたら自分一人しか人間はいないのではないか、という可能性は思っていたよりも精神的な負担が大きいものだ。

川にぶつかりさえすれば後は遡るれば帰れるはずなので、最低限方角を間違えなければ迷いはしないと思うが、念には念を入れて小まめに印を残しつつ、将貴は森へと分け行った。誰かがいてほしい、と密かに思いながら。

◆◆◆

木々の間に見え隠れする屋根を追って森を進むと、1件の家が建

つ開けた空間にたどり着いた。
久しぶりに見る文明の痕跡に安堵し、外観を観察してみる。
その建物は、屋根より薄いライトブラウンの壁面で飾られた、所謂洋館風のデザインであった。遠目では煉瓦作りかと思ったが、近寄ってみると石のように頑丈でありながら、木材のような柔らかみのある奇妙な質感があった。建築素材に詳しいわけではないが、見たことのない材質に、
（思っていたより発展してるのかな）
などと思う。
ちょうど正面側に出たようで、そのまま玄関口と思われるドアに向かい、ある事に気づいて眉をひそめた。
ドアから軒にかけて、５０ｃｍはありそうな大きな蜘蛛の巣がはっていたのだ。しかも出来てからそれなりに日数の経っていると思われる、干からびた虫が張り付いたままのものが。
蜘蛛の巣は意外に早く出来るものだとよく聞くが、さすがに数日でこのサイズの巣を作った上、かかった獲物が乾燥するまで放置されたりはしないのではないだろうか。
近寄ってみると玄関先はいつから掃除していないのかと思うくらいに汚れ、長いこと使われた痕跡がないように思う。念のため何度か強めにノックをしてみるが（ノックの習慣があるのかは分からないが）、しばらく待ってみても人の気配がない。やはり無人なのだろうか。
鍵がかかっているのかドアが開かなかったため、そこから入るのは早々に諦めた。他に入れそうな入口か窓が無いか探しながら、壁伝いに回り込んでみることにする。
（結局こっちに来たときと同じことをしているな）
この世界に漂流した初日のことを思い出しながら密かに苦笑する。
正面側、ドアの横に並んでいる窓はガラスがはめ込まれたものだったが、カーテンが閉められているのか中を伺うことは出来なかった。こちらも鍵がかかっているようで、開く様子はない。最悪、ガ

ラスを割って入ることも考えたが、もし中に人がいたら無意味に敵対心を煽ることになるかもしれないので、それは最後の手段にしておきたい。

結局正面の窓は全滅。さらなる入口を探して回り込み、手前から1つ1つ確かめているうちに、それに気がついた。

途中で壁の材質があからさまに変わっているのだ。

正面側から続いていたなめらかなライトブラウンの壁材が、建物の2／3あたりで途切れたように消え、継ぎ足したかのような木材の壁面に変わっている。窓もガラスではなく、両開きの木製の雨戸になっていた。

「――もしかして」

ふと思いついて、山刀をシャベル代わりに壁材が変わっている部分の地面を掘り返してみる。

地面に生えた雑草を引き抜き、薄く積もった表土を取り除くと、あるラインを境に、綺麗に土の種類が変わっているのが分かった。

嘆息する。

それ以上掘り返そうとは思わなかったが、この境界線は恐らく円状に続いているのだろう。

「ここもうちと同じ、お客さんか」

◆　◆　◆

「よっ……と」

裏側の継ぎ足し部分はセキュリティについてはかなり適当だったようで、閂のかかっていない窓を見つけて侵入する。

締め切られているせいで薄暗い部屋の中に飛び降り、ぶわっと舞い上がった埃に軽く咳き込む。やはりしばらく使われていないようだ。光源確保兼換気のために、入った部屋の他の窓をすべて開け放つ。

部屋の中は壁も床も材木がむき出しで、ログハウスのような作り

になっていた。物置替わりに使われていたようで、大きさもまちまちな木箱がずらりと積み重ねられていた。
　そのうちいくつかに小さく文字らしきものが書き込まれているのに気付き、歩み寄る。
「英語じゃないな……どこの文字かな」
　残念ながら、将貴の知識ではそこに書いてある文字を読むことは出来なかった。どこの国の文字かも分からない。いくつかの文字はアルファベットに似てるとは思ったが、あいにく西欧圏の言語はさっぱりだった。それ以外なら読めるというわけではないが。
　手近な箱を開けてみると、緩衝材とガラス瓶が詰め込まれていた。他の箱に何が入っているのかかなり気になったが、荷解きを始めたらいつまでかかるか分からないので後回しにする。現状、このような加工品の補充は絶望的なので、いいものがあったら是非持って帰りたい。
　侵入した窓とは反対側の壁に出口があったので、荷物の隙間を抜けてそちらに向かう。
　出口をくぐると、絨毯の敷かれた幅の広い廊下に出た。どうやらこの廊下から境界線の内側らしい。境界線に削られてむき出しになった部分は、まるごと取り壊してログハウスにしたのだろう。
　そう考え、ふと気付く。
　建物自体の広さは拠点としている我が家の母屋よりだいぶ広い。従って建て増ししたログハウス部分も結構な面積に渡っているが、その造りはかなりしっかりしている。少なくとも一人二人で作れるような規模じゃない。１０人単位でこの世界に来たのか、それとも建築を頼めるような相手が近くに住んでいるのかもしれない。
　この建物自体は放棄されているようだが、滞在を何日か伸ばしてここの周りも探索したほうがいいか。
　そこまで考えたところで思考を切り替え、まずは建物の中を見て回ることにした。

元からある方の部屋をいくつか覗いてみた結果、外観とは裏腹にここは一種の工場、あるいは工房のようなものらしいと思った。居住にはふさわしくなさそうな、用途の分からない工具や機材がずらりと並んでいるのだ。もしかしたら突き抜けた趣味人の自宅である可能性もあるが。

次に入った部屋は窓がなく、明るさに慣れた目では中が良く見えないが、やはり人の気配はない。ドアから差し込む光もあるが、結構な広さがある部屋のようで、入口付近が照らされるに留まっていた。

荷物の中からランプを取り出し、明かりをつけた。

同時に、部屋の中が照らされる。

部屋の中央には応接間のようにソファーがコの字に並べられ……

「っ！」

人の姿に気付き、息を呑む。

正面の一人がけのソファーに、一人の女性が姿勢よく座っていた。

その双眸は閉じられ、色は分からない。

肩までの長さのクリーム色の髪に、白い肌。形の良い顎から下は、ボディタイツのような肌に密着した服で覆われているようだ。

「死体……いや、人形？」

呼吸のような最低限の動きすらない彫像のように固まった体を見て、一瞬いやな予感を感じたが、近付いてよくよく見てみればそれは人の姿によく似せた人形のようだった。

髪や肌の色も相俟って、どこか西欧風の顔立ち。純白のボディタイツに見えたのは外装らしく、顔の皮膚……に見えた部分と一体化している。胴体はシルエットだけ見るならスレンダーな女性の体型をなぞっており、柔らかそうな質感がある。一方、腕と足は色こそ胴体と同じだがより硬質的で所々に分割線が走っており、とくにその付け根の関節部分は可動域の確保のためか内部の機械部分がむき出しの構造になっていた。

……なぜこんなところに人形が？
疑問に思い、半ば無意識に手を伸ばす。
その指先が人形の顔に触れた瞬間。

指先に熱が弾けた。

「くっ……あぁっ……！！」
反射的に手を引こうとしても体は動かず、強く噛み締めた口から声が漏れる。
指先から体中の活力が吸い出されるような感覚。
熱が全身に広がり、体中が活性化している。
全身からエネルギーが集まり、そして指先を通して放出されていく。
意外なことに決して危機感や不快感はなく、むしろ絶頂に達したときのような快感があった。
それが続いたのは一瞬か、あるいは数分、数十分か。軽い虚脱感に朦朧とした将貴から力の放出が止まると同時に、体が動くようになった。
頼りない足にふらつき、崩れ落ちるようにして後ろに座り込む。

――――キュィィ……

しばらく荒い息をついていると、唐突に、小さな金属音が聞こえた。
将貴は顔をあげ、それと目があった。
冷たい光を放つ、水色の瞳。
いつの間にか目を開き、じっとこちらを見つめていた人形。それは目があったことに気付き、ゆっくりとソファーから立ち上がる。
そして膝をつき、人形とは思えない優雅な仕草で礼をしながらこう言った。

「――――はじめまして、我(わたし)が主。ようやくお会いできました」

その声は、鈴の音のように涼やかだった。

０５話　遭遇（後書き）

ロボ子っていいですよね。
うちにも欲しい。
次は３日後くらいに。

０６話　転写（前書き）

説明回ですひゃっはー

06話　転写

「……君は、何だ？」

しばしの沈黙を起き、将貴は口を開いた。

少し前までなら、人形相手に何を話しかけているんだ、と自分に問いただしていただろう。しかしこちらを見ていた人形の目の動きは確かに“興味”を持って“観察”していた動きであり、目が合った瞬間、わずかにだが表情が動いたのだ。

少なくともこちらのことを認識する程度の知性があるのではないかと思った。おかしな言い方だが、それが有りうると思う程度には異常慣れしていた。

将貴は立ち上がりかけ――立ちくらみをしたかのように目眩を感じ、姿勢をくずす。と――

ぼふっと柔らかいものに受け止められる。

見ればいつの間に動いたのか、立ち上がった人形の胸に抱きとめられていた。

相手は人形とは言え、急に気恥ずかしさを感じ、反射的に離れようとして、その腕で強く抱きしめられた。額にあたる感触で、その胸元に青いクリスタルのようなものがある事に気がつく。そのまま、耳元で囁かれた。

「失礼しました。少し――お返しします」

その言葉と同時、クリスタルと触れている箇所からじわりと暖かいものが伝わってきた。そのエネルギーは、ゆっくりと身体に広がっていく。

「これは……？」

「これは、先ほど主から与えられた――魔力(マナ)、に相当するエネルギーです。ワタシを形成したうえで、余剰となったものをお返しします」
このエネルギーそのものを示す名称は残念ながら知識には無いので、イメージの近いものとして仮に魔力(マナ)と呼称します、と断りをいれた上でそう言った。
少しの間を置いて、人形(彼女)は体を離す。
そして将貴は、先ほどまでの疲労感が消え、好調とまではいかないものの体力が戻ってきているのを感じた。
身体の調子を不思議そうに確認しながら、再び尋ねた。
「主とはどういう事なのか。それに今の魔力っていうのは……」
「ワタシは、主のアストラル体そのものです。主がこの素体(ボディ)に接触してアストラル体と知識を転写したことにより、ワタシという自我が発生しました。肉体的な面においてはあくまでこの素体(ボディ)に依存していますが、アストラル体の面で言うならば主の分身であり、自我と肉体を含めたワタシは主の子供となります」
と、表情こそほとんど変わらないものの、人形(彼女)は自慢げに胸をはった。

この世界には所謂魔力(マナ)の概念に近い性質のエネルギーが満ちており、それを体内に取り込むことで、アストラル体と称する魔力(マナ)を処理する回路が形成される。アストラル体によって処理された魔力(マナ)は基本的に身体能力の強化や回復に用いられるという。

「……それで最近、妙に調子が良かったのか」
「ハイ。初めの日は、恐らく魔力(マナ)を摂取したことによるショックと、アストラル体形成の際の反動で倒れたのではないかと」
「何でそれを知って――って、知識も取り込んだって言ってたか」

「ワタシには、知識と同時にある程度の経験、記憶も《転写》されています」
「その《転写》というのは？」
アストラル体は魔力（マナ）をエネルギーに変換するだけでなく、ある種の“機能”を有していた、と人形は答えた。
体内に蓄えた魔力（マナ）をインクとしてアストラル体という回路のコピーを素体（ボディ）に書き込むことで、同時にそれを統括するための自我が発生した。それはつまり、自分のアストラル体を転写するという機能自体を有しているということになり、
「それじゃあ、君自身もその……《転写》、をすることが出来ると言うことか？」
人形（彼女）は是、と答えた。
「可能ですが、ワタシという存在を転写した時のように、ほぼすべての魔力（マナ）を消費することになります。主の場合は自我の保持にアストラル体は不要なため疲労ですみましたが、ワタシは自我の維持のために魔力（マナ）を必要とするため――」
転写を行なった時点で、存在が消失します、と告げた。
それではあまり意味はないな……と思ったところで、ふと気がついた。
「そういえばさっき余った魔力（マナ）を返したって言ったけど、大丈夫なのか！？」
将貴の中にある“生命体”という概念とは異なる存在ではあるものの、相手は確かな自我のある存在だと既に認識してしまっている。心配そうな顔を向けた将貴に、人形（彼女）は首を振る。
「魔力（マナ）を取り込む機能自体もアストラル体にあるようです。こうして話している間にも、徐々に回復しています。自我とアストラル体の維持のためのリソースは確保されているため、《転写》のような無茶をするか素体（ボディ）が破壊されない限りは、ワタシが消滅することはありません」
それなら安心だ、と将貴は胸をなでおろした。

「ところで、俺の知識をベースとしているって言うけど、そんなことが出来るなんて全然知らなかったけど？」
そう、地球――元いた世界では魔力（マナ）なんてものは存在しなかった以上、それがどの様な働きをしているのか、将貴の知識からは説明できるはずはないのだ。
そう尋ねると、
「主には見えずワタシが認識できたものを、主の知識の中にあるもので表現しただけです。氷を見たことがない人に氷について聞かれたときに、“水で出来ている”“冷たい”“固い”ものであると教えるようなモノだと思ってください」
人形（彼女）は《転写》という機能について説明したが、それはあくまで自己のを存在と、それを生み出したプロセスから逆説的に解釈したものだ。アストラル体や《転写》については、“何ができたか”は分かるものの、“何をできるか”は分からないという。
「《転写》自体、主特有の機能なのか、この世界にくれば誰でも出来るのかわかりません」
「あまり参考にならないのな」
そう冗談めかして言うと、肩を落として落ち込んでしまったので、慌ててフォローを入れる。
知識は共通していても、精神面ではまだまだ未成熟なようだ。

そういえば、と気付く。
「まだ名前を聞いてなかった。……というか、名前はあるのか？」
否、と首を振る。
「主に付けて欲しいです」
「それじゃあ……」

元の世界の有名な神話に出てくる戦乙女の名。

彼女にはその名が相応しいと思った。

レギン（受け継ぐ者）レイヴ

◆◆◆

折角魔法のようなことが出来るようになっているのだ。いろいろと《転写》について実験してみたいところだが、どうもレジィ――愛称としてそう呼ぶことにした――を生み出すのに必要な魔力（マナ）量は相当なものらしく、溜めるのに1月やそこらの時間は必要らしいという事が分かった。

ならばなぜこの世界に来てから2週間も経っていないのに《転写》が出来たかというと、恐らく最初のアストラル体形成の際に大量の魔力（マナ）を吸収したからではないかという。少なくとも今の魔力（マナ）回復速度から計算すると、それくらいの時間はかかりそうだ。

ただ、魔力（マナ）回復速度については、ある解決方法があった。

先ほども行なったように、レジィと将貴の間では胸元のクリスタルを通じて魔力のやり取りが出来たのだ。

同一のアストラル体を持つということは、魔力（マナ）回復速度も同等ということになる。単純計算で2倍の魔力（マナ）を吸収出来る。

「このクリスタルは魔力（マナ）が結晶化したもののようです。ワタシの一部として同時に作られたようですが、これがバイパスの役割を果たしているようですね」

魔力（マナ）を《転写》したとも解釈できます。これは意外に自由度が高いようです、とレジィは言った。

そして魔力（マナ）量の他にも、2点ほど《転写》を試せない理由があった。

一つは《転写》する対象が限られること。
意識はレジィのアストラル体が持つものの、物理的な動作はあくまで素体（ボディ）のスペックに由来するものであった。つまりは物理的に稼働するものでないと、《転写》は出来ないようだ。これは触れるだけで発動する《転写》に、これまで気づかなかったことからも裏付けられた。また、独自のアストラル体を持つものに対して上書きとなる《転写》は出来ないだろう、というのがレジィの談だった。
死体だったらどうなんだろう、と将貴は一瞬思ったが、怖い考えになりそうだったので止めた。

そしてもう一つは、《転写》を行うことでレジィのような存在が生まれるかもしれないということ。
レジィ自身についてどうこう言うつもりはまったくないが、それでも“実験”と称して無責任に人格を持つ存在を生み出すことには少々抵抗があった。案外レジィは姉妹ができたと喜ぶかもしれないが――
“家族”が増えること自体はいいかもな、などと呟いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7976z/

レギオンの将

2012年1月6日19時26分発行